

第四回「はなやすり出版文化を考える会」資料

日時：2024年10月19日（土）

場所：名古屋国際会議場 433 会議室

— 資料内容 —

○文学者を知る 11「薄田泣菫」、12「若山牧水」、13「浜田広介」

14「金子みすゞ」、15「島木健作」

○「和紙—地域の自然を活かした文化」

○「熱田を知る 其の二」

○「月刊『HANAYASURI』復刊に向けて」

資料作成 相地 透

<文学者を知る 11 「薄田泣菫」>

1 基本情報

- ・ 詩人、随筆家。
- ・ 1877（明治 10）年生、1945（昭和 20）年没。
- ・ 現在の倉敷市に生まれる。17 歳で上京、22 歳で帰郷。泣菫の雅号で古語や漢語を多用した詩を発表する。29 歳のときに京都で結婚、翌年長女が生まれる。次第に詩作から離れはじめ、家計をまかなうために新聞紙面で随筆を発表するようになる。40 歳でパーキンソン病を発症。この頃から西宮市で暮らす。戦中は井原町（現、井原市）に疎開。45 年 10 月 4 日、意識不明となり井原から蓮島に戻るが 9 日に逝去。

2 重要である理由

- ・ 早くから詩集が出版されていたため、後の文学者たちに与えた影響は大きい。新美南吉が最初に購入した岩波文庫は「泣菫詩抄」。

- ・ 詩作を離れてからは、随筆を数多く発表している。その随筆の数々からは、身近な自然をよく観察することで生まれる愛慕の念と、人間の心の機微がよく伝わる。

- ・ 青年期はヨーロッパを舞台とした小説を愛読しており、生まれ育った瀬戸内ののどかな田園風景と遠く離れた海外の風景を重ね合わせて捉えていた。

3 ゆかりの土地

- ・ 倉敷市……岡山の海が近い村である連島村（現在の倉敷市連島）で生まれ育つ。「薄田泣菫生家」が史跡として保存されている。

- ・ 西宮市……大阪毎日新聞の学芸部長についてから晩年まで暮らした。この時期に西宮の小学校の校歌を作詞している。夙川には「雑草園」と自身で呼んでいた旧居が残る。関連のある施設としては「兵庫県立美術館」。

- ・ 岡山市……岡山に縁のある文学者を取り上げた「吉備路文学館」がある。

4 参考文献や資料など

- ・ 「泣菫随筆」（谷沢永一、山野博史 編／富山房）

<文学者を知る 12 「若山牧水」>

1 基本情報

- ・歌人。
- ・1885（明治18）年生、1928（昭和3）年没。
- ・現在の日向市に生まれる。中学時代に短歌と俳句を始める。牧水の号は母の名「牧」と生家の周りの溪や雨の「水」からとったもの。早稲田大学時代は北原白秋と同級生だった。生涯にわたり、各地を旅して、歌を詠んでおり、歌碑が立てられている。長年の大量飲酒による急性胃腸炎と肝硬変を併発し、43歳で亡くなる。生涯に8794首を残す。

2 重要である理由

- ・若山牧水は旅を愛し、各地を訪ねることで身の回りの情景を歌にした。そのルーツは、西行、芭蕉にある。若山牧水の歌が自然を愛したことにより生まれたことは、紀行文・エッセイを読み解くとよく理解できる。

・都市での生活に心身が疲弊し、自然豊かな地に生活の場を移したのは、中勘助や藤井達吉の精神状況と行動に近い。人も生活も、急速に近代化していく都市にあって、もともとの日本的環境に包まれながら表現活動をしたいと望んだ文学者は多かったのかもしれない。

・静岡県が千本松原の松を伐採する計画をした時、新聞に「沼津千本松原」という文章を寄せた。千本松原を形成する樹木についての深い洞察と、歴史における土地の重要性を説いた。その後、市民大会でも苦手な演説をし、結果、計画は中止になった。

3 ゆかりの土地

- ・日向市……出生地。「若山牧水文学記念館」がある。

・沼津市……千本松原の景観を愛し、一家で移住した土地。現在、「沼津市若山牧水記念館」がある。

4 参考文献や資料など

- ・「樹木とその葉」（田畑書店）

<文学者を知る 13 「浜田広介」>

1 基本情報

- ・ 童話作家。
- ・ 1893（明治 26）年生、1973（昭和 48）年没。
- ・ 山形県高畠町に生まれる。中学校時代はアンデルセン童話に親しむ。学生時代に懸賞のために書いた童話「黄金の稲束」が一等となり、巖谷小波に作品が人間の善意のみで書かれていることを称賛された。「善意の精神」は生涯にわたり、創作のテーマとなる。大学卒業後、いくつかの出版社勤務を経て、関東大震災後、童話作家として独立した。1980 年に日本児童文芸家協会を設立する。

2 重要である理由

- ・ 西行、若山牧水、會津八一などの歌人と芭蕉を敬愛し「(自分の) 童話においては、七五調にちかい調子に招かれて集まることばが、それぞれに自分に似ている音律を相ともなうて寄り合うようなはたらきを、しぜんにもつ」と述べている。

- ・ 「自然が人に教えるものを感じとること」を「人間の第一資格」として、朝夕、自然の風物、小動物、虫などを観察し、童話の源泉としていた。

- ・ 重要文学者との繋がりとしては、学生時代に北原白秋、薄田泣菫（ほかに島崎藤村、蒲原有明）を愛読している。また、新美南吉も日記で 20 歳上の浜田広介の作品を誉めている。

3 ゆかりの土地

- ・ 高畠町……出生地。「まほろば童話の里 浜田広介記念館」がある。

4 参考文献や資料など

- ・ 「父浜田廣介の生涯」（浜田留美／筑摩書房）

<文学者を知る 14 「金子みすゞ」>

1 基本情報

- ・ 詩人。
- ・ 1903（明治 36）年生、1930 年没。
- ・ 現在の長門市仙崎で生まれる。西條八十の後押しを受け、詩・童謡作家として注目された存在だったが、幼いわが子の成長を守るため 26 歳で自ら命を絶つ。その後、1980 年代まで、みすゞの詩は忘れられた状態が続いた。

2 重要である理由

・ 若くして自ら命を絶っている事、亡くなってから、その詩があらためて世間に知らされるまで時間がかかった事などから、金子みすゞが自分の身の回りの自然を観て、感じていたもの、重ね合わせていた事柄を知るには、現時点では、残された詩を読み、住んでいた地域を知ること、心を寄せるほかに無い。

・ 自分の気に入った作品をまとめて編集した「琅玕集（ろうかんしゅう）」に、異聖歌の代表作「水口」を入れている。一方、異聖歌は大正 14 年の日記の知友一覧に、金子みすゞの名前と住所を記している。戦後、1954 年に異聖歌の編集で刊行された「日本幼年童話全集 7 童謡編」（河出書房）では、みすゞの作品を 10 編掲載した。異聖歌にとっては、南吉とともに、多くの人に読んでもらいたいと思っていた存在だったのだろう。

3 ゆかりの土地

・ 長門市……生まれてから一家の事情で下関市に移るまで住んでいた土地。現在、生まれ育った書店「金子文英堂」が保存され、隣に「金子みすゞ記念館」がある。

・ 下関市……金子みすゞが多くの詩を書いたのは、下関で生活していた頃。下関市唐戸には、金子みすゞ詩の小径という名前をつけて、多くの詩碑が立てられている。

4 参考文献や資料など

- ・ 「金子みすゞ」（小倉真理子／勉誠出版）

<文学者を知る 15 「島木健作」>

1 基本情報

- ・小説家。
- ・1903（明治36）年生、1945（昭和20）年没。
- ・札幌市に生まれる。高等小学校を中退し、銀行の給仕などを勤め家計を助けながら、本を読んで学ぶ。一旦上京するが、一年ほどで帰郷。結核を患っていることが分かる。北海中学卒業後、東北帝国大学在学中に、東北学連に参加。仙台の労働組合結成に携わる。卒業後は、香川で農民運動に参加する。1928年に三・一五事件で検挙、起訴されると翌年、転向声明を出し、さらに翌年、有罪判決を受け服役。肺結核に苦しみ、1932年に仮釈放される。その後は、本郷で兄が営む古本屋に落ち着き、作家として活動を始める。その多くは自分自身の半生を題材としたものである。1937年に鎌倉に居を移す。1945年、肺結核が悪化し終戦の2日後、8月17日に亡くなる。

2 重要である理由

- ・文学者となったのは、農民運動に関わり、検挙され、釈放された後である。まず自分自身が生きるべき第一の人生があったが、さまざまな要因から文学者の自分が生まれた。
- ・第一次産業である農業に従事する人たちの生活を、自身の体験をもとに描いている。
- ・母方の祖母は、明治維新後に北海道に渡った開拓民だった。島木健作は、3代目の北海道人であり、北方人であるというアイデンティティを強くもっていたが、郷土を題材とした物語は書いていない。

3 ゆかりの土地

- ・鎌倉市……1937年から亡くなるまでの8年間を過ごした。「土地」「赤蛙」「黒猫」などの物語はこの時期に書かれている。北鎌倉の浄智寺に墓がある。
- ・伊豆市……修善寺温泉街は「赤蛙」の舞台となった場所とされ、赤蛙公園という小さな公園が作られている。

4 参考文献や資料など

- ・「島木健作」（福田清人、矢野健二／清水書院）

<和紙—地域の自然を活かした文化>

—和紙に注目する理由（箇条書き）—

- ・地域の自然の循環を活かした産業である。
- ・道具作りから紙の生産まで、すべての工程を同じ土地で行うことができる。
- ・植物繊維を取り出すことが可能であれば、どんな植物でも和紙になり得る。
- ・人の手で漉かれるため、紙一点一点に個性が生まれる。
- ・和紙の使用用途は多岐にわたる。文字を書き記す紙として使うだけでなく、固くすることで箱や敷物を作ることもできる。伝統的に使われている例としては、髷を結うための元結、障子紙・襖紙など居住空間に使われる紙、美術品の修復に使用される紙、紙衣、団扇など。現在はコーヒーのペーパーフィルターなどにも用いられている。

—出版社の担える役割（箇条書き）—

- 和紙に関する総合情報誌の刊行（年4回）。
- 伝統工芸士を減らしている和紙の里同士の交流、産業の活性化に貢献する。
- 和紙を生産している人と、質の良い和紙を必要としている人をつなぐ。
- 和紙生産が途絶えてしまった地域の歴史や文化を発信することで、その地域の和紙産業を再び復活させる機運を高める。
- 新しい地場産業として和紙産業を考えている地域と、実際に行っている地域をつなぐ。

—参考文献や資料—

「和紙の歴史 製法と原材料の変遷」（宍倉佐敏／財印刷朝陽会）

「世界の紙と日本の和紙」（紙の温度株式会社／グラフィック社）

「越前和紙を知ろう」（越前和紙の里）

<熱田を知る 其の二>

11 ほうろく地蔵

かつて上知我麻神社があった付近、旧東海道の道標がある辺りに祠があり、お地蔵さまが安置されている。「尾張名所図会」によれば、この石地蔵は、もと三河国重原村（現在、知立市）にあったが、野原の中に倒れ、捨石のようになっていた。ところが、三河より焙烙（ほうろく）を売りに尾張へ来るものが、荷物の片方の重しとしてこの石仏を運んできて、ここで焙烙を売りつくした後、石仏を海辺の葦原に捨てて帰った。地元の人がこの石仏を発見し、安置しようとしたが、動かないので怪しんで、その下を掘ってみると、土中にこの仏の台座と思われる角石が深く埋もれていたため、皆が不思議なことだと思い、その台座を掘り出し、この石仏を置いたのが、すなわちこの地蔵である。

12 景清社

景清は平家の侍大将忠清の次子で、腕力に優れていた。平家没落後、縁あって熱田の地に隠れ住んだといわれる。謡曲「景清」では「尾張の国熱田にて遊女と相馴れ一人の子を設く」とうたわれている。後年、景清は眼病を患い、失明したという伝説から、この景清社は眼病に靈験があるとして信仰が篤い。

13 亀井山円福寺（かめいさん えんぶくじ）

亀井山と号し、時宗。元応元年（1319）、足利氏の一族とされる巖阿の開基で、足利尊氏も祈願所として堂宇を建立したといわれる。永享4年（1432）9月、六代將軍義数は富士遊覧のため下向の折、当寺に三日間逗留し、連歌会を催した。当寺にはこの時の連歌懐紙や尾張円福寺文書、伝小栗宗湛筆紙本墨画豊千禪師図（いずれも県指定文化財）を伝えている。

14 源頼朝出生地

この地は平安時代末期、熱田大宮司藤原氏の別邸があったところで、藤原季範の娘、由良御前は、源義朝の正室となり、身ごもって久安3年（1147）、熱田の実家に帰り、この別邸で頼朝を生んだといわれる。享禄2年（1529）、別邸跡に妙光尼日秀、世にいう善光上人により誓願寺が建てられた。妙光山と号し、西山浄土宗の寺で、本尊は木造阿弥陀如来坐像である。

<月刊「HANAYASURI」復刊に向けて>

1 復刊までのスケジュール

10/21 頃	2025 年度月刊「HANAYASURI」予約フォーム公開
10 月下旬	22、23 年度購読者の方へ予約フォーム公開のお知らせ
11 月～3 月	各連載など、誌面の決定事項をブログでお知らせ
3 月上旬	刷部数の決定と購読料のお支払いについてご案内
4 月上旬	2024 年「観察会レポート集」発行
5/1 頃	復刊、第一号発行

2 復刊に必要な購読者数 ・最低 500 人、目標 700 人以上

3 検討している新連載一覧

- 1 マリア・モンテッソーリの生涯と教育への想い
- 2 熱田の寺、仏教をめぐる話
- 3 藤井達吉と自然
- 4 伊那谷の四季
- 5 山本音吉と聖書和訳
- 6 イヌワシが生きる環境を取り戻す
- 7 変形菌のいる森
- 8 詩の小部屋
- 9 新美南吉と異聖歌
- 10 熱田植物記

4 継続するページ一覧

- ・表紙
- ・巻頭エッセイ
- ・相地満連載
- ・子どもが不思議と出会うとき
- ・観察会レポート
- ・詩と絵のページ
- ・日常エッセイ
- ・編集方針
- ・各号、座談会&特集

5 その他

- ・観察会や会のお知らせは別刷りにする。可能であれば、読者の方々が取り組んでいる活動のお知らせを記載できたら、より良い。